アーチェリー協会

沿　　革

1. アーチエリーの歴史

人類が弓を発明したのは、今から数万年前（後期石期時代）の頃といわれている。このことは、エネルギーを蓄え遠くへ矢を飛ばす技術と火と車輪の発明とともに画期的なできごとであった。

弓は、狩猟用として、そして戦いの道具として発達して来たが鉄砲の出現とともに、その価値は、失われていった。スポーツとしてイギリスを中心に、その価値が１６世紀頃から認識され、特にイギリスのヘンリー８世が幾度もアーチェリーの競技会を開催してスポーツとしての地位を確立させたといわれている。

モントリオール合宿

弓は、大きく次の３つの型に分類されている。

(1) メディタレイニアン型（地中海方式）

(2) モンゴリアン型（蒙古方式）－日本の弓

(3) ピンチ型（土人の弓）

アーチェリーは、メディタレィニアン型に属し、現在までに色々と改良が加えられ、精度の高い競技用のものに発達し、現在に至っている。

1931年に、国際アーチェリー連盟（ＦＩＴＡ）がイギリスを中心に創立された。オリンピックには第４回ロンドン大会（1904年）、第７回アントワープ大会（1912年）で正式種目として競技が行われた。その後、５２年振りにミュンヘンオリンピック（1972年）に再び正式種目になり、モントリオール大会（1976年）で道永選手が銀メダルで日の丸をあげたことは記憶に新しいところである。

日本にアーチェリーを紹介したのは、菅　重義氏が1939年（昭和14年）にアメリカから持ち帰り紹介したといわれている。1966年（昭和41年）に全日本アーチェリー連盟と発展し、現在の組織が確立した。1969年（昭和44年）国際アーチェリー連盟（ＦＩＴＡ）、ＪＯＣに正式加盟し、1970年（昭和45年）日本体育協会に加盟が承認された。 1976年（昭和51年）に1980年（昭和55年）栃木国体から国体正式種目にすることが決定され、昨年、本年の２年間、国体参加記念都道府県対抗アーチェリー競技大会として国体参加に向けて大会を運営している。

北海道では、1960年（昭和35年）日本アーチェリー協会川上会長が来道して、札幌市で始射会を持ち、北海道アーチェリー協会が組織された。

十勝では、1963年（昭和38年）にヤマハオートバイの展示会が帯広市で開かれたとき、ヤマハの弓具も同時に展示された。これを見て斉藤昭男帯広アーチェリー協会顧問　五十嵐邦夫帯広アーチェリー協会事務長らが買い求め、指導者もなく手さぐりの状態でアーチェリーを始めたといわれている。

次第に同好者の輪が広がり、上士幌農協、清水町、新得町、本別町等で協会が設立され、清水町、

新得町では専用レンヂを作り活発な活動が始まった。

1966年（昭和41年）北海道アーチェリー協会帯広支部（高橋慶三支部長）が設立され、十勝の組織が確立した。1966年（昭和41年）に第1回十勝アーチェリー大会が帯広第1中学校グランド（現帯広市総合体育館）で20名の参加で開催された。1969年（昭和44年）帯広市体育連盟に加盟し、現在に至っている。

1967年（昭和42年）、帯広市西1条南9丁目にエスカイヤが23Mの屋内レンヂを常設し、今の帯広アーチェリー協会の先輩の皆さんが腕を競いあったといわれ、今でも時々話題になっている。そして1969年（昭和44年）にアーチェリーのプロショップとしてオビヒロアーチェリー・ロビンフットクラブ（帯広市白樺16条東19丁目）が30Mのインドアのアーチェリー場をオープンし、年間通して練習が可能となり、協会員の技術と、アーチェリー普及に加速度がつき、協会員の増加とともに、帯広勢が全道を制覇するようになった。そして、ミュンヘン・モントリオールの両オリンピックの代表選手の最終合宿に選ばれ、最終の仕上げがなされている。

幕別では、1970年（昭和45年）勝山　衛幕別アーチェリー協会長が船津宗忠帯広アーチェリー協会長に誘われてアーチェリーを始め、幕別町として第1号の帯広アーチェリー協会の会員になった。1972年（昭和47年）頃から、上鹿渡・宮部・佐々木（明）・西出会員らが相前後してアーチェリーを始めて、帯広アーチェリー協会の会員となった。この頃、札内の沢田公園内にアーチェリー場が設けられ、アーチェリーを楽しむ人がある程度いたが競技人口に育つまでには至らなかったようである。

1976年（昭和51年）帯広市総合体育館で第1回アーチェリー教室が開催され、山田（政）、原田（喜）会員らが第一期生として、アーチャーの仲間入りをした。

1974年（昭和49年）に幕別高校で授業の一環としてアーチェリーが取りあげられ、翌年からはクラブ活動として活動を始め、高校生への普及も軌道に乗り出した。

幕別町では、1974年（昭和49年）10月20日に国民宿舎幕別温泉ホテル前に特設レンヂを設営して、第1回の幕別アーチェリー大会を開催していらい毎年の恒例の行事となっている。また、1975年からは、幕別町青少年アーチェリー大会を開催し、アーチェリーの普及、技術の向上に努めている。

1978年（昭和53年）10月15日には、幕別アーチェリー協会結成5周年記念大会を開催し、今日まで幕別アーチェリー協会の運営に陰に陽に協力を戴いた、船津帯広アーチェリー協会長、林一夫幕別町体育連盟前副会長、郷司体連事務局次長、上鹿渡会員（帯広アーチェリー協会常任理事）に感謝の楯を贈り、幕別アーチェリー協会の発展に協力戴いたことに感謝の意をあらわしている。

今年は、6月に第12回全日本社会人アーチェリー選手権大会兼日中友好親善アーチェリー大会が帯広市グリーンパークで開催され、世界アーチェリー選手権大会（ミュンヘン）の日本代表選手、中国

第5回幕別アーチェリー大会

中国選手とともに

選手とともに、幕別協会からは、宮部．奥沢両会員が北海道代表選手として参加し、勝山会長をはじめ協会員全員が総務．記録．審判．接待等の役員として大会運営に参加し活躍した。

また、今年は、幕別町高令者アーチェリー教室を町教育委員会の企画で、幕別アーチェリー協会が担当し、札内．幕別の両地区で開催し約２５名の方がアーチェリーを楽しんでいる。

2. 幕別アーチエリー協会設立と幕別町体育連盟加盟

勝山　衛　会長

幕別アーチェリー協会は、1973年（昭和48年）10月10日、幕別町に関係するアーチェリー競技者が集り勝山　衛会員を会長に選出し、西出会員を事務局長として協会を設立した。

幕別アーチェリー協会の経緯は、帯広アーチェリー協会で活動している幕別町在住者や、幕別町に職場を持つアーチャーの数が次第に増加し幕別にも協会を作ろうという気運が盛り上り、勝山．上鹿渡．宮部．西出会員らが設立のための準備を進め、アーチェリー競技の普及と会員相互の研修を目的として、帯広アーチェリー協会 船津会長．品田理事長．五十嵐事務局長をはじめ帯広アーチェリー協会員の全面的な理解と協力を得て設立した。

幕別町体育連盟の加入は、当時の町体育連盟林一夫副会長．郷司体育連盟事務局次長の助言を受けながら準備を進め、1974年（昭和49年）3月、町体育連盟の理事会に上鹿渡．西出会員が出席し、アーチェリー競技の内容について説明して体育連盟に加入申請をし、理事会で承認された。そして、4月の体育連盟の総会で正式加盟が認められ、幕別町のスポーツ団体として確認された。

この年の10月20日　幕別アーチェリー協会設立を記念して、第1回の記念大会を幕別温泉ホテル前に特設レンヂを設け、５０M、３０M　シングルラウンドで、町長杯・議長杯・教育長杯をかけて釧路からも設立を祝して参加を戴き３５名で大会を開催した。競技終了後、国民宿舎内で表彰式をかねて懇親会を持ち、船津帯広アーチェリー協会長に「意志のあるところ道あり」の大理石の楯を贈り感謝の意をあらわすとともに、幕別アーチェリー協会員夫人の手作りの豚汁などを肴に話の花を咲かせ、幕別アーチェリー協会の前途を祝した。

幕別協会会員

幕別高校アーチエリー部員とともに

3. 主な活動記録

第1回北海道インドアアーチェリー選手権大会	46. 2. 21（帯広）	優勝(団体)	勝山・船津・吉田	2809
第2回北海道インドアアーチェリー選手権大会	47. 2. 22（帯広）	優勝	勝山　衛	699
春季十勝アーチェリー選手権大会	47. 6. 11	優勝	勝山　衛	1058
第5回地崎杯争奪全道アーチェリー大会	47. 6. 18（旭川）	8位	勝山　衛	1033
第5回道新杯争奪全道アーチェリー大会	47. 8. 20（帯広）	6位	勝山　衛	1042
〃　〃		優勝(団体)	勝山・殿内・吉田	3218
第13回北海道アーチェリー選手権大会	47. 9. 10（札幌）	10位	勝山　衛	1031

第2回インドア　団体　優勝

第7回全道インドアアーチエリー大会

第4回北海道インドアアーチェリー選手権大会	49. 3. 10（帯広）	4位	宮部定信	963
〃　〃		8位	西出　元	950
春季十勝アーチェリー選手権大会	49. 5. 19	優勝	宮部定信	1041
第6回北海道インドアアーチエリー選手権大会	51. 3. 14（札幌）	7位	宮部定信	528
〃　〃		2位(団体)	宮部・殿内・佐藤(義)	1572
第5回北海道選抜アーチェリー選手権東大会	51. 7. 11（旭川）	3位	奥沢昭芳	1098
〃　〃		7位	宮部定信	1067
〃　〃		9位	西出　元	1061
第9回道新杯争奪全道アーチェリー東大会	51. 8. 8（帯広）	優勝	奥沢昭芳	1150
〃　〃		7位	宮部定信	1079
〃　〃		10位	石崎光啓	1057
第7回北海道アーチェリー選手権大会	51. 9. 5（帯広）	6位	宮部定信	1123
第10回地崎杯争奪全道アーチェリー大会	52. 6. 22（札幌）	4位(成年A)	西出　元	553
第6回北海道選抜アーチェリー選手権東大会	52. 7. 10（釧路）	5位	奥沢昭芳	1037
〃　〃		9位	宮部定信	999
春季十勝アーチェリー選手権大会	53. 6. 11	2位	西出　元	1137
第11回地崎杯争奪全道アーチェリー大会	53. 6.（札幌）	4位(成年A)	上鹿渡武治	588
〃　〃		3位(少年)	小林秀樹	
第33回国体記念都道府県対抗アーチェリー大会	53. 8. 26、27（長野県南箕輪）	道代表	鈴木善昭	

第12回地崎杯争奪全道アーチェリー大会	54. 6. 10（札幌）	優勝（成年A）	西出　元	577
〃　　〃		3位（成年B）	奥沢昭芳	601
〃　　〃		優勝（少年）	佐藤　誠	576
第8回北海道選抜アーチェリー選手権東大会	54. 7. 8（釧路）	2位	奥沢昭芳	1179
〃　　〃		6位	西出　元	1126
〃　　〃		2位	西出和代	1029
第12回道新杯争奪全道アーチェリー大会	54. 8. 19（室蘭）	3位	西出和代	896

第35回国体記念都道府県大会

第12回全国高校選手権大会

第35回国体記念都道府県対抗アーチェリー大会

	54. 8. 24～26（栃木県馬頭町）	道代表　監督	西出　元	595
〃　　〃		道代表	佐藤　誠	586
第20回北海道アーチェリー選手権大会	54. 9. 9（帯広）	5位	西出和代	1028
幕別町スポーツ奨励賞	54. 10. 1		西出　元	

〈幕別アーチェリー大会優勝記録〉

第1回	優勝	宮部定信	600	49. 10. 20	幕別温泉前特設レンヂ
第2回	優勝	西出　元	586	50. 10. 19	〃
第3回	優勝	奥沢昭芳	603	51. 10. 17	〃
第4回	優勝	西出　元	540	52. 10. 16	札内川運動公園
第5回	優勝	上鹿渡武治	587	53. 10. 15	幕別温泉前特設レンヂ
〃	優勝（B）	山田政義	579	〃	〃
第6回	優勝	川瀬光政	595	54. 10. 14	〃
〃	優勝（B）	山田政義	413	〃	〃
第1回	優勝	細川吉松	349	54. 10. 14	〃
（高令者）	優勝	鎌田アサノ	331	〃	〃

〈幕別青少年アーチェリー大会優勝記録〉

第1回	優勝	中村泰宏	316	猪早祐子	276	50. 10. 5	幕別高校特設レンヂ
第2回	優勝	石崎光啓	569	三沢史佐子	436	51. 9. 12	〃
第3回	優勝	大滝義勝	549	阿部香織	570	52. 9. 25	〃

第4回	優勝	佐藤　誠	569	阿部香織	556	53. 9. 24	幕別高校特設レンヂ
第5回	優勝	鈴木誠治	557	山田美樹	543	54. 9. 16	〃

現　　況

1. 現在の活動状況

アーチェリーの人口は、十勝で1,000人程といわれているが、競技者として日本アーチェリー連盟、北海道高等学校アーチェリー連盟に登録されているのは、約150名程である。他のスポーツと比較するとこれからのスポーツであると考えられる。競技人口の拡大が当面の第1の課題である。白樺高校柏葉高校・音更高校・大谷高校・池田高校　清水高校・帯広農業高校・幕別高校等でのクラブ、個人でアーチェリー競技をし、社会人・大学で競技者として活動を始めており、また、アーチェリー教室を通してアーチェリー人口の拡大を図っている。

幕別アーチェリー協会員は、全員帯広アーチェリー協会員として、全日本アーチェリー連盟に競技者登録をしており、全道・全国につながる次のような各種の大会に出場している。

帯広アーチェリー協会月例大会（兼 全道大会予選会）
十勝アーチェリー選手権大会（春季・秋季）
地崎杯争奪全道アーチェリー大会（兼 都道府県対抗アーチェリー大会予選会）
道新杯争奪全道アーチェリー大会（全日本アーチェリー選手権標準記録会）
北海道選抜アーチェリー選手権大会（　〃　〃　）
北海道アーチェリー選手権大会　（　〃　〃　）
北海道インドアアーチェリー選手権大会

第20回全道選手権大会　全景

上記の競技会を通して日頃の練習の成果を発表している。また、帯広アーチェリー協会には、副会長に勝山会長、常任理事に上鹿渡・西出会員、理事に宮部・川瀬・奥沢会員が就任し、協会の運営にも参画している。

幕別アーチェリー協会としての大会は、幕別アーチェリー大会と幕別青少年アーチェリー大会の二つの大会を企画・運営し、アーチェリー競技の普及とレベルアップを図っている。

2. 高令者アーチエリー教室

今年は、アーチェリーの理解と普及、そして、健康と楽しみを目的として、幕別町教育委員会が高令者スポーツ教室として取りあげ、幕別アーチェリー協会員が指導を受け持ち、全道的にもユニークなスポーツ教室として注目されている。

5月から10月まで月2回、1回2時間、10回の教室で、最後に総仕上げとしてアーチェリー大会を開催する。教室は、幕別・札内の2会場で、それぞれ10数名の参加者を得て、幕別教室は小室学級長を中心に幕別高校レンヂで、札内は、篠原学級長を中心に札内スポーツセンターで開講している。

幕別町教育委員会郷司係長、村上社会教育主事の熱心な運営と学級生の練習熱が10月3日の大会に向けて最後の仕上げをし、大会は、幕別・札内あわせて、約25名の男女の高令アーチャーが13Mのコースで、篠原さんが力強く選手宣誓をし競技を開始し、男子は、細川吉松選手、女子は、高橋よしの選手が優勝した。大会後、学級生の要望で年間の活動に発展させるように準備中である。

高令者アーチエリー教室

高令者アーチエリー教室大会表彰

3. 高校生の活動状況

幕別の高校生がアーチェリーを手にしたのは、1974年（昭和49年）授業の一環として必修クラブの一つとして西出会員が指導をはじめてからである。翌50年に幕別高校にアーチェリー同好会が発足し、同年6月の第7回全道高校アーチェリー大会に全員が自費で参加した。昭和51年クラブとなり、同年の秋に、全道高校秋季大会を幕別高等学校特設レンヂで開催した。幕別町・教育委員会・帯広アーチェリー協会・幕別アーチェリー協会等の全面的な協力を受けた。この全道大会が刺激となり翌年（昭和52年）の秋の全道大会で団体準優勝、個人優勝（小林）し、幕別町スポーツ教育奨励賞を受賞した。

そして、1978年（昭和53年）春には団体準優勝、秋は団体優勝、個人優勝（斉藤）した。この年から全国高校アーチェリー選手権大会、国体記念都道府県対抗アーチェリー大会に道代表として出場する生徒が幕別町内から出るようになってきた。また、十勝の高校のアーチェリーレベル向上のため1976年（昭和51年）から十勝高校選手権を開催している。更に、1979年（昭和53年度）2月に全道高校インドア通信アーチェリー選手権を開催し冬期間の技術向上にも努力している。

〈高校生の記録〉

北海道学生アーチェリー通信大会	50. 9. 21	優勝（団体）	幕別高等学校（川口・石崎・菱岡）	1754

北海道学生アーチェリー通信大会	50. 9. 21	準優勝	川口貞重（幕高）	614
〃		3位	石崎光啓（幕高）	607
第9回秋季北海道高等学校アーチェリー大会	52. 10. 2	準優勝（団体）幕別高等学校		1646
			（鈴木・小林・中村・斉藤・設楽）	
〃		優勝	小林秀樹（幕高）	566
〃		5位	鈴木善昭（幕高）	552
〃		6位	西出和代（池高）	460
幕別町スポーツ教育奨励賞	53. 3. 31	団体	幕別高等学校アーチェリー部	
〃		個人	小林秀樹（幕高）	
〃		〃	鈴木善昭（幕高）	
〃		〃	西出和代（池高）	
第10回春季北海道高等学校アーチェリー大会	53. 6. 4（清水町）	準優勝（団体）	幕別高等学校	
			（鈴木・小林・斉藤・設楽・中村）	
〃		3位	鈴木善昭（幕高）	580
〃		5位	西出和代（池高）	502
第11回全国高等学校アーチェリー選手権大会	53. 7. 27（青森県十和田市）	西出和代（池高）		
第33回国体記念都道府県対抗アーチェリー大会	53. 8. 26、27（長野県南箕輪）	道代表 鈴木善昭（幕高）		
第10回秋季北海道アーチェリー大会	53. 10. 1（札幌）	優勝（団体）	幕別高等学校	1725
			（斉藤・佐藤・設楽・北風・洞）	
		優勝	斉藤　剛（幕高）	593
		3位	佐藤　誠（幕高）	576

第１０回秋季全道高校団体優勝

第１１回春季全道高校団体準優勝

第11回春季北海道高等学校アーチェリー大会	54. 6. 3（倶知安町）	準優勝（団体）	幕別高等学校	
			（斉藤・佐藤・設楽・北風・洞）	
		優勝	佐藤　誠（幕高）	577
		6位	斉藤　剛（幕高）	557
第12回全国高等学校アーチェリー選手権大会	54. 7. 29（広島県広島市）	佐藤　誠		571
第34回国体記念道府県対抗アーチェリー大会	54. 8. 24～26（栃木県馬頭町）	道代表 佐藤　誠		586
幕別町スポーツ奨励賞	54. 10. 1	団体	幕別高等学校アーチェリー部	
			（斉藤・佐藤・設楽　北風　洞）	

幕別町スポーツ奨励賞	54. 10. 1	個人	斉藤　剛（幕高）
帯広市スポーツ奨励賞	54. 10. 10	個人	佐藤　誠（幕高）

展　　望

アーチェリー競技が十勝で育って１６年、十勝・帯広の一般、高校生のアーチェリーは、全道において高く評価されている。しかし、競技人口が他のスポーツに比べて少ないこと、管内での普及がまだ十分でない。高校でのクラブ活動、アーチェリー教室等で育った人達が年々増加しつつあり、この活動の輪を大きく育てていく責任が協会に課せられている。

前述の一般、高校生の記録に見られる通り、全道的には立派な記録を出しているが、昨年、今年と全国大会に参加して技術的には遜色はないが競いあって勝つ精神力が今一歩である。全道チャンピオンに満足せず、全国大会で勝つアーチャーを育てる努力をしなければならない。

また、町民がいつでもアーチェリーを楽しめる射場（屋内・屋外）の整備と、その他の条件設定を急ぐ必要がある。このようにアーチェリー人口を広げて行くことが協会として将来への夢を託すことになると考えている。